

庄司薫

ぼくの
大好きな
青髭

ぼくの大好きな青髭

庄司薫

中央公論社

ぼくの大好きな青髭

©1977 検印廃止

昭和52年 7月25日 初版

昭和52年 8月25日 7版

著者 庄 司 薫 発行者 高 梨 茂 印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社 東京都中央区京橋2-1 電話(03)561-5921(代)

ぼくの大好きな青髭

一九六九年七月二十日の午前十時少し過ぎ、開店直後の新宿紀伊国屋のエスカレーター昇り口のわきのところで、ぼくは一体自分が第三者の眼にはどんな若者にうつっているのかを初めはちょっと相当に気にしながら、激しい夏の陽ざしの中に突っ立っていた。というのもぼくは、洗いだ、この春植木屋が縁の下に置き忘れていった古い麦わら帽子をかぶって素足に木のサンダルをつっかけ、薄鼠色になった古い昆虫網を小脇にかかえて、さらに（ここが重要なのだが）鼻の下にかなり立派な八の字型の髭をつけてあたりを睥睨していたのだ。

でも、人通りがまだ少いせいかもしれない周りにいる若い連中がみんなそれぞれ工夫を凝らしているためか、ぼくのこの苦心のいでたちも、あれこれ心配していたほど異様に人目を惹いているとは思われなかった。ぼくはそうしてしばらく突っ立っているうちに、麦わら帽子を斜めに傾け

たり、サングラスを鼻の先の方にとぼけた具合にずらしてみたりする余裕も身につけた。とりあえずの結論は、どうやらまずまずとこ、やや正確に言えば、出直す必要のあるほどの「やりすぎ」には（残念ながら）なっていない、というところだった。さて、それではショーペンハワーだ……。ぼくは、主観的には極端に飄々とした雰囲気でエスカレーターに乗って二階に昇っていったものだった。

紀伊国屋の店内はまだお客よりも店員の動きが目立つような状況で、ここではさすがにぼくはひとかどの注目を集めた。でも、すでに表通りで自信をつけていたぼくは、抱えこんでいる問題の深刻さとは全く無関係に、明らかにちょっと得意な、やや晴れがましいような気分で、悠然として哲学書の置かれている棚の方に歩いていった。どういうんだろう、この晴れがましいような気持は。たとえばお葬式なんかでよく思うのだが、喪服姿がすごく似合ってべらぼうに衆目を集めている女性は、お葬式そのもののへの悲しみとは全く無関係に実は大変に嬉しいんじゃないか、といった感じがあるわけだが、それと同じようなもの、とでもいうのだろうか。それにぼくの場合、その麦わら帽子やら昆虫網やら髭やらがあつて、それで目指すはショーペンハワーっていうんだから、そのカッコよさというダンディズム（？）ときたら、これはもう相当のものではあるまいか。

ところが、やがてぼくは、この他でもない天下の紀伊国屋にして、ショーペンハワーの著書もまた彼に関する本も、極端に少いことを発見した。いや少ないなんていうより、全然ないのだ。

こういうことは、考えて見るとわりとよくあることなのだが、それでも気づいたその時には相当びっくりするものだ。あ、流行^{ハヤ}ってないんだこの人、なんて軽く考えてみて、でもそれから次第にそのはやってないんだなって感じが重苦しく胃袋のあたりに固まり出してきて。

特にこの、ショーペンハウアーが今はやってないというのは、ぼくにとつて相当にショックだった。何故って、前の晩ぼくは朝の四時までうち中の本をひっかきまわしてショーペンハウアーの即席研究に従事し、今回の高橋の事件に対する、ぼくの最初は明らかに「希望的観測」とでもいった期待が、次第に事態の核心を衝く一つの仮説とでもいったものになっていくことを知って、ちよつと相当に昂奮してしまったのだ。だって、そうでもなければ、どうしてこんな麦わら帽子に昆虫網に髭なんかであれこれ頑張るものか。しかし、そうは言ってもぼくの中には、どこかまだ高橋に対する不信感みたいなのがあったわけだ。なんていうか、高橋にショーペンハウアーとはできすぎだ、とでもいった気持、可哀そうに、悪い「流行」に巻きこまれたにちがいあるまい、とでもいった気持……。だからぼくは、最初、つまり昨日の夕方高橋のお母さんから突然の電話をもらったその時にも、全然ピンとこなかった……。

でも、それにしてもあれはもの凄^{ヒド}いママだったな。ぼくはとにかく、とるものもと^とりあえず自転車にとび乗ってその病院へ駆けつけたのだが、ロビーのところ^とで待っていた彼女ときたら、まるでこれから歌舞伎座へ出かけますってスタイルだった。つまり彼女ときたら、淡い水色の着物に銀色っぽい帯に銀色のハンドバッグに銀色の草履で、それこそまあピカピカしてて、ちよつと

赭く染めた髪の毛にまでピカピカした粉が振ってあって、要するに、とても自殺を企って目下生死の境をさまよっている一人息子の母親とは見えなかったわけだ。

そして彼女は、ぼくを見るとまさに嫣然として笑ったな。なんていうか、自分が新珠三千代かなんかで今テレビに映ってるところです、と自分で思ってる、っていうのが第三者にすぐ分るようなそんな感じ。ほら、ぼくたちでもよくあるじゃないか。友達とギャング映画なんかを見て出てきて、ふと気がついていたら友達も自分も、なんとなくこう肩いからせて顎をひいて周りを上目づかいでネメまわして歩いていたりすることが。いやあ恥ずかしい。でも、もっと恥ずかしいのに、例の「兄弟仁義」流のヤクザ映画を見たあとなつてのがあるな。ふと小林のやつなんかと肩が触れて、ふと目と目を見合せたらお互いにその「おっ、キョーデー」みたいな目差になっててね。ギャだなあこれは。以後半年は確実に気持ち悪いわけだ、こういうのは。

ところで、こんな具合に高橋夫人のディテールに関する感想を述べつつ話してたらきりがないので突如として要点を述べれば、彼女がぼくに話したのは大要次のようなことだった。一、高橋がその日の昼下りに突然睡眠薬と殺虫剤をのんで自殺をはかったこと。二、彼はもともと心臓とか腎臓とかいろいろ悪いので助かるかどうかまだはつきりしないこと。三、自殺の理由は不明で遺書もないこと。四、まだ死んでしまったわけではないので（！）、誰にも知らせず秘密にしていること。五、ところが、或る週刊誌の記者が嗅ぎつけて病院に電話で取材を申し入れてきて、断ったら、では友達を紹介しろと言ったこと。六、そこであなた（つまりぼく）を紹介してしま

ったので、きつとすぐにでもその記者から連絡があると思われるけれど、その前に一度お会いしていろいろお話ししておきたいと思ったこと……。

彼女はこういったことを、なんていうか突になまめかしいとでもいうか、つまり病院のロビーの片隅で瀕死の息子について語る母親というより、静かで凝ったレストランで逢引きしている不倫の人妻、といった雰囲気でしたものだった。つまり、目を伏せて話していたかと思うとスッと目上げてぼくの目をじっと見つめ、それからふと目をそらせてその憂いに充ちた横顔をぼくに觀賞させてくれるってわけなのだが、その時必ず二、三度微かに目ばたきをする、といったようなものなんだな。ただ問題は（あくまでも話を早くするために思い切って言っちゃえば）、要するに彼女は、その流し目や、ぼくに見せてくれているつもりの憂いに充ちた横顔に似合うほど美しくなかった、という点にあった。言いかえれば、もしぼくが彼女と完全に調子を合せようとするなら、ぼくは彼女のそのすべての目差や表情を、いちいちテレビ画面の新珠三千代のそれに翻訳して受けとめなければならぬ、とでもいった事態に置かれてしまったのだ。そしてこれは、分ると思うけれど相当すさまじい事態であつたわけなんだ。

もちろんぼくは、ぼくの当惑をただちに顔色に出すような真似はしなかった。たんに目上の人への礼儀としてといった種類の理由からではなく、まことに幸運にも、その時ふとサンテクジュペリの『南方郵便機』かなんかを思いうかべたおかげにちがいはなかった、とぼくは思う。つまりその本の中には、ジュヌヴィエーヴという、ちょっと謎めきすぎていて苛いらするけれどそこ

がまたなんとも素敵、みたいなヒロインが出てきて、そして彼女が生死の境をさまよう愛児を必死に看病するところがあるのだが、そんな或る午後、彼女は彼女の疲労を心配した医師の命令に従って散歩に出て、ふと立ち寄った骨董屋で花瓶なんかを買いこむのだ（ここはなかなかいい場面なんだ）。ところがそこに、いやったらしい俗物の典型みたいな夫が出てきて、花瓶を抱えて帰ってきた彼女をめちゃくちゃに非難する。坊やが死にかけているというのに、骨董屋をひやかしてまわるなんてなにごとか、それでも母親なのか！で、こういう小説をいったん思い出したら、誰だってこの夫みたいな俗物の役割はつとめたくないと思うのは当り前のわけだ。それになんといったって、高橋夫人が極めて風変りなジュヌヴィエーヴである可能性が（それが極端に小さいのはまことに残念にしても）、全くないわけじゃなかったのだから。

それに、別に気がとがめてあわてて弁護に乗り出すわけではないのだが、ぼくは彼女に当惑するその一方で、かえって妙にこう心動かされるようなところがあつたんだなあ。というのは、たとえば彼女は、何故自分が週刊誌の記者と会いたくないかということ、夫の立場を初めとする家庭の事情なんかをあげていろいろ説明したあげく（高橋のおやじは或る一流銀行の重役なんだ）、ふっとこんなことを、実に正直に弱り果てた感じで言ったりしたわけだ。

「恥を申し上げるようですけれど、あたくし、どういうことなんでしょ、時々、大変に誤解されることがありますのよ。それも男のかたに、全く心当りがございませぬのに、ひどく悪い印象を与えてしまいますの。もちろん、そういうもじゃございませんし、ふだんは気にもしないんです

けど、このたびは場合が場合でございましょう？　ねえ？」

しかも彼女は、そう言ったとたんにも例のなんともいえない困った目差でぼくをじっと見つめ、それから例の目ばたきとともに、その花やかな和服の上半身をかすかにくねらせるようにして憂いに充ちた横顔をぼくに觀賞させ、さらに続いては、中指に大きな翡翠かなんかの指輪をはめ爪には銀色のマニキュアをした右手の指先をそりかえさせるようにして、美容院から出てきたばかりの髪みたいな襟足のあたりをたおやかになでたりしたものだった。なんていうんだろう。世の中には、泣きたくなるほどおかしいような哀しいようなことつてのが時に厳然としてあるものらしいんだ。

もっともぼくが、彼女の考えてみれば相当に面倒くさい依頼をまるごとあっさり引き受けたのは、言うまでもなく彼女へのそんなおかしい同情みたいな気持からではなく、あくまでも高橋のためだった。何故って、浪人した東大受験生の自殺ってことならわりと平凡な話だけれど、そこにこのなんとも想像力を誘う母親（？）が加わったら、これは確実に事件になってしまうのではあるまいか。彼女がひどく申し訳ながっていた、自分は週刊誌の記者に会いたくないという「わがまま」も、こっちからむしろお願いしたいことだったわけだ。

しかし、それにしても彼女には最後までびっくりさせられた。いよいよ別れようとして立上ってから、ぼくはずっと気になっていたこと、つまり彼女が何故高橋の友達としてぼくを選んだのかを訊いたのだが、すると彼女は、なんのためらいもなく、例の嫣然とした笑みをたたえてさら

つと答えたのだ。

「お友達の名前で聞いたことのあるのはあなただけだったんですのよ。」

ぼくは思わず何か言いそうになって、苦勞して呑みこんだ。分ると思うけれど、なにか、とてつもなく皮肉な言葉が出てくるような気がしたからだ。たとえば、ぼくだって彼とはほとんど口きいたこともないんですよ、といったような。なんていうのだろう。高橋っていうやつは、この学校のどのクラスにも必ずいると思うけれど、なんとなく影が薄いとでもいうのか、確かに顔は知っているのだが、いるのかいないのか誰も氣にとめない、といったタイプの典型だった。それも陰氣にこそこしているタイプではなくて、なんとなくニコニコしているのがかえって印象を薄くしてしまっていていったタイプだった。おかしい言い方だが、人間の存在感みたいなものは、少くとも外見から言った場合、いかにも陰氣に深刻そうに思いつめたような暗い表情をしている方が重くって、ニコニコしていちゃ駄目なのではあるまいか。特にぼくたちのようなまだ中味で勝負できない年頃には。で、とにかくそんなわけだったから、高橋に友達がほとんどいなかったというのには確かにありうることだった。このぼくにしても、例の半年前のショーペンハウアーの件がなければ、ほんとに彼とは言葉一つかわさずに終ったのはほぼ確実にちがいなかったのだから。だから、お友達の名前で聞いたことのあるのはあなただけだったんですよ、っていう彼女の言葉は、確かに事実をそのまま言ったにはちがいがなかった。ただね、問題は、そうやって事実をそのまま言ってもらいたくはないことってのが、この世の中には時々あるっていうことなのだ。

可哀そうな息子のために（或いは母親としての見栄からでもいいから）、とにかく何か色をつけて、せめて言いにくそうな風情をつけるとかなんとか工夫して言ってくれなくては困るようなことが。

ところが彼女は何をどう思ったのか、突っ立ったまま杲然としているほくに突然音もなくびったりと寄り添うと、ぼくの右手を両手で包むように握り、そして、ぼくの耳に口をつけてささやくようにして、よろしくね、と言いながら小さくたたんだ紙幣をぼくの手に押しこんだものだった。ほんとに、なんていうか、なんだか可哀そうなほどどこか鈍くて、やることなすことみんなくいちがってしまふんだ、このひとは。彼女はきっとこの病院でも、恐らくこの調子で医師や看護婦をいらいらさせ、でも本人はその理由が分らないまま、ますますその流し目や嫣然とした笑みにみがきをかけて事態を悪化させているにちがいない。そしてそれでもなんとなく不安だと、みんなにやたらとチップを押しついたりして、しかもそれが誰でもかまわず五百円札だったりして……。いや、別に金額にこだわるわけじゃないんだ。ただぼくは、その握らされた紙幣を見もしないまま、とんでもない、と彼女に返そうとし、そして、どうぞおとりになって、ほんの気持だけでごさいますのよ、なんて言う彼女と延々と、まるで歌舞伎のお軽勘平道行きの図みたいに押しくらまんじゅうをやったあげく、とうとう根負けして受けとったわけなのだが、そこでふとその大問題たる係争物件が五百円札だったのに気づいた時の気持について、ちょっと察してもらいたいわけなんだなあ。繰返すけれど、確かに金額はこの場合問題にすべきじゃないと思うのだ

けれど、でもやっぱり問題なんだよ、どこか。改めて言うまでもないかもしれないけれど、人にお金をやるってことは、なんか乾坤一擲とでもいうか、いちかばちかみたいな難しいところがあるんではなからうか。つまり、そう片方だけが勝手に気楽におっ始めちゃ、困るところがあると思うんだ。つまりこういう場合……、でもそうだ、もう何度となく言ったようにも思うけれど、彼女について話すのはもうやめよう。問題はショーペンハウアー、いや、なんていうのだろう、つまり高橋自身なんだから。

その高橋にぼくが突然、考えてみれば初めて声をかけられたのは、去年の暮れ、もうじき冬休みになるという頃のことだった。昼休みに廊下を歩いていたら、突然背中から忍び寄せられたような感じで袖をつかまえられて、ふりむいたら彼がニコニコして立っていたんだ。そして彼は、お願いがあるんですけど、なんてまるで下級生みたいに丁寧な言葉で語りだしたものだ。一度きみのところへ遊びに行っていでしょうか？ 冬休みに、いつでもきみの都合のいい時に、一時間ばかり、いつでもいいんです、ってわけなんだな。そして彼はどういうわけか真赤な皮表紙の手帳をとり出して、ぼくの目の前で、まるでほんとにいつでもいいんだということを証明するともそういうように拵げて見せたのだが、ぼくはそれを見たときに何やら分らぬまま、とにかくその「冬休み開始」と赤インクで書いてあるその日を指さしてOKしてしまったものだった。何故って、彼のその十二月の予定表には、「冬至」と「クリスマス」という印刷された活字の他

には、ほんとうにその赤インクの「冬休み開始」という文字つきり書かれていなかったのだから。そしてその「冬休み開始」の日、驚いたことに彼はフルートをさげてやってきた。つまり、その時初めて分ったのだが、彼の用件とは、ぼくにピアノで彼のフルートの伴奏をして欲しいということだったのだ。何が何やらわけが分らないままなんとなく気が重かったが、お安い御用とホッとしたのは言うまでもない。ところが、なんてことだ、彼はたった一曲だけ、ビゼーの『アルルの女』の中の「メヌエット」しか吹かないんだ。つまり、まず一回目を合せて、まあわりといいものだからぼくが感心したら、彼はもしもじして、もう一度いいですか？ と言ったわけだ。ところが二回目を終って、今度はぼくのピアノの方も様子が分ってきたせいで全体にもっとうまくいったのだが、ぼくがそのことを言うと、彼はまた嬉しそうにもしもじして、じゃ、なんて言ってフルートをまた構えて目を閉じてしまったではないか。そして、言うまでもなくピアノの上にはその「メヌエット」の譜が開かれているだけ。それに、そこでぼくは初めて気がついたんだけど、そもそも彼が持ってきた楽譜はこれだけだったのだ。もちろんぼくは念のために、三回目が終わったところで、何か他の曲はどうか、ときいてみた。すると彼はその、よく見れば中肉中背なのになんとなく小柄な肥満児のように見えるからだをすくめるようにして答えた。「これきり吹けないんです。」

「でも、それだけ吹けるんだから、」と、ぼくは一応は冗談だと考えて笑ったものだった。だって、その「メヌエット」がフルートとしてどの程度難しい曲かは分らないけれど、たとえばピアノ

ノで「仔犬のワルツ」だけしか弾けませんなんてことがあり得るだろうか？　ところが彼は、身も世もなく困惑したといったような、しかし一方ではなんとなく誇らしやかな表情で、ほんとなんです、と言った。

「まだ始めて半年なんです。この曲だけ習ってたんです。」

「でも、それだけ吹けるようになるのはわりと大変なんでしょう？」

「さあ、よく分らないんです。」

「でもですね、ほら、基礎みたいなのがあるわけでしょう？」

「小学生の時、鼓笛隊に入って笛吹いてたことがあるんです。」

「鼓笛隊ってのは、あの例の、お祭のパレードとか港区の秋の運動会とかみたいなのに出てくるやつですか？」

「ええ。でもすぐやめたんです。歩きながらですから疲れすぎたんです。」

「ははあ。」

ぼくは、彼のいつまでたっても丁寧な言葉づかいに合せているせいか、それとも少年鼓笛隊員という突然の猛烈なイメージにびっくりしたせいか、とにかくなんとなく鼻白んで、言葉が続かなくなってしまった。ぼくは、しょうがなくて言った。

「じゃ、もう一回やりますか。」

「ええ。」